

本誌はネット配信のみとなっています。紙での配布は行っていませんのでご了承ください。



彩の国埼玉県

埼玉県立
歴史と民俗の博物館

THE A MUSEUM

Vol.15-1 第 43 号

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore

企画展

新収集品展

令和2年 10月10日(土) ~ 11月23日(月) 祝



きもの絵本



木村和恵銘仙コレクション



どうぞうぼさつぎょうりゅうぞう
銅造菩薩形立像



埼玉県関係レコード・CD



だいこんにや ほら みつたきよう
大般若波羅蜜多經 卷第九十九

当館は、昭和 46 年(1971)の開館以来、埼玉県の歴史や文化を伝える様々な資料を収集し、県民共有の大切な財産として次世代に継承するため、その保存・管理・活用に努めてまいりました。

本企画展では、多くの皆様のご厚意とご協力により、平成 30 年度および令和元年度に新たに当館に収蔵された資料を紹介いたします。当館の収蔵資料に仲間入り、「埼玉県民の宝」となった数々の資料をご覧ください。

企画展 新収集品展 2018・2019

当館では令和2年10月10日(土)～11月23日(月・祝)まで、企画展「新収集品展2018・2019」を開催しています。

当館は、前身である埼玉県立博物館が昭和46年(1971)に開館して以来、埼玉に関する資料を、県民共有の文化遺産として収集・保管・活用するとともに、調査研究し次世代に継承するという使命を果たすべく、運営をしてまいりました。

当館が収集する資料は、歴史、美術工芸、民俗と扱う分野は幅広く、現在、約12万点の資料を保管しています。当館の収蔵資料の核となっているのは、開館以来、これまで延べ300名を超える方からご寄贈いただいた寄贈資料です。

今回の展覧会では、平成30年度・令和元年度に収集した資料について、ご寄贈いただいたものを中心に、「古美術」、「民俗」、「歴史」の3つの分野に分けてご紹介いたします。この2年間、多くの方にご協力いただいたことにより、当館の収蔵資料は、更なる充実をみせることとなりました。心からお礼申し上げます。

新たに収集された資料は、当館が2年間にわたって行ってきた調査・研究の成果を表すものでもあります。ぜひ開催期間中に当館に足をお運びいただき、新たに「埼玉県民の宝」となった資料たちに会いにいらしてください。

■古美術分野

まず、本展覧会の見どころの一つが、「大般若波羅蜜多だいほんにやほらみつた経 卷第九十九きょう」です。ときがわ町慈光寺に伝来する大般若波羅蜜多経(通称 大般若経)と本来は一組であったと考えられる経典です。慈光寺の大般若経は、貞観13年(871)、上野国の役人 安倍小水麻呂あみずまろが所願成就を祈願して書写させたもので、同寺には152巻が現存し、平安時代、特に関東で書写された経典がまとまって現存する例は少なく貴重であることから、国指定重要文化財に指定されています。今回展示される経典は、書いてある内容から、全600巻のうちの巻第九十九に該当すると考えられます。

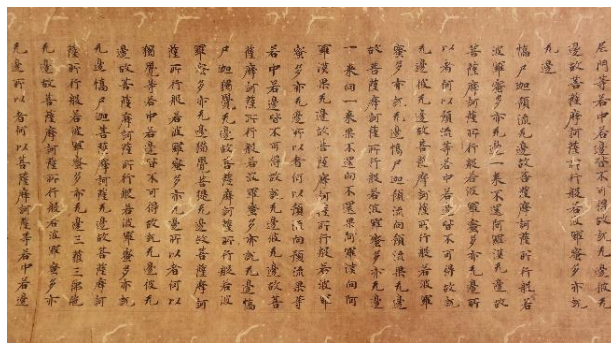


写真 大般若波羅蜜多経 卷第九十九

もう1点、銅造菩薩形立像どうぞうぼさつぎょうりゅうざうも興味深い資料です。この仏像は、平安時代に制作されたと考えられる菩薩像で、なんらかの事情で長く土中にあったものが掘り出されたためか、表面の磨滅が目立ちます。台座下に伸びる茎の形から、宝冠阿弥陀如来像の脇侍像とみられます。現物はとても小さな仏像ですが、間近でじっくりとご覧ください。

このほか、古美術では古筆切コレクションと茶道具コレクションが特筆されます。前者のうち、「伝源俊頼筆民部切でんみなものとしよりひつみんぶきれ」は、古来より「民部切」の名前を冠する名物切の一つで、小松茂美著『古筆学大成』第二巻所収の優品です。また、後者の茶道具コレクションのうち、「天明二重肩釜てんみょうにしゅうかたがま」は東日本における茶釜の一大産地である栃木県佐野市で鑄造されたもので、室町～安土桃山時代の茶釜とされます。ここに紹介したもの以外にも見ごたえがある資料が展示されており、じっくりとお楽しみください。



写真 天明二重肩釜

■民俗分野

民俗分野の資料については、衣類・服飾に関する資料

が多く収集されました。初めに銘仙関連資料を御紹介します。銘仙とは、大正から昭和時代にかけて安価でお洒落な着物として人気を博した着物の総称です。特に、型染めした経糸を使って織る「ほぐし織」の技法が登場したことで、華やかな模様や多色の表現が可能となり、多くの人々を魅了しました。今回は、デザインや色が魅力的なものを中心にご紹介いたします。

他にも、昭和10年代に行われた婚礼に際して用意された、婚礼衣裳及び婚礼道具関係資料が寄贈されています。この資料は、資料の状態が大変良い上に、着用者及び着用された時代が明らかになっており、当時の婚礼の様子を私たちに教えてくれる資料です。

県南部でかつては桐材が産出されていたこと、また大消費地の江戸・東京に近い地の利に恵まれていたことにより、春日部市では桐箆筥が古くから生産されてきました。今回、県内で桐箆筥製作に携わっていた職人が使用していた道具をご寄贈いただきました。現在の製作工程の多くは機械化されていますが、それ以前の職人の手仕事や、現在もお息づく熟練の技術を実感できる資料です。



写真 春日部桐箆筥製作用具

■歴史分野

歴史分野では、成川家の歴史を語る武家の資料群が特筆されます。中でも「しまだひでより・きのしたひでよし嶋田秀順・木下秀吉連署奉書」は、織田信長が永禄12年(1569)に將軍足利義昭を奉じて入京したころの信長による京都の寺社支配に関する文書で、秀吉の関係文書として初期段階のもので、秀吉文書の集大成である『豊臣秀吉文書集』に未収録の文書で

あり、現在放映中のNHK大河ドラマ『麒麟がくる』の関連史料としても見逃せない資料です。



写真 嶋田秀順・木下秀吉連署奉書

また、現在放映中の連続テレビ小説「エール」は、作曲家・古関裕而と妻金子をモデルにした物語ですが、「埼玉県関係レコード・CD」の中には、古関が作曲した楽曲のレコードが含まれています。昭和54年(1979)、蕨市が市制施行20周年記念で製作した「わらび音頭」のB面「わらび小唄」は、昭和23年(1948年)の古関の作曲です。なお、歌手は由紀さおりです。このほかのレコードにも、三波春夫や三橋美智也、橋幸夫、都はるみといった演歌の大御所たちが登場しています。展示室でお聴きいただけないのが残念ですが、ジャケットから当時の世相や雰囲気うかがえますので、お楽しみください。

今年、開催される予定であった「東京オリンピック 2020」は、新型コロナウイルス感染症の影響で残念ながら延期になってしまいました。ちょうど56年前の10月10日土曜日に第18回オリンピック競技大会が東京の国立競技場で開会しました。この時の関連資料として、当時の入場券や競技役員の方々から寄贈されたユニフォームなど貴重な資料を展示しています。前回大会当時の資料を通して、来年の東京オリンピックに思いをはせて頂ければ幸いです。

(資料調査・活用担当 新井浩文・後藤知美)

いま、ここでしかできない体験をあなたに ～コロナ禍におけるものづくり工房の取り組み～

今回は、コロナ禍におけるものづくり工房の運営についてご紹介します。

ものづくり工房は、ゆめ・体験ひろば内にあります。ゆめ・体験ひろばとは、子どもから高齢の方まで楽しんでいただける3つのエリアで構成された入場無料の体験学習ゾーンです。1つ目は多様なハンズオンアイテムを自由に選び自在に楽しむ「自由自在座」。2つ目は1960～1970年代の昭和の雰囲気を再現した屋外スペースの「昭和のはらっぱ」。そして3つ目は、ものづくり体験を通して伝統的なものづくりのわざとこころを学ぶ場である「ものづくり工房」です。

コロナ以前のものづくり工房

ものづくり工房の体験メニュー「藍染めハンカチ」「まが玉」「江戸組紐ストラップ」などは、予約なしでも当日体験できる手軽さから、春休みや夏休み、GWをはじめ土日祝日は多くの方々に体験いただき、工房内は朝から常に活気に満ち溢れていました。時には、スタッフの数が足りない！テーブルの数が少ない！というくらいの賑わいで、大変なこともありましたが、体験者の喜んでいただいている姿を見て非常にやりがいを感じた日々でした。

コロナ以降のものづくり工房

国内で新型コロナウイルス感染症の感染者数が増加している中、当館も、2月下旬から臨時休館することとなりました。

休館中は、どうしたら来館者に安全に体験メニューを楽しんでいただけるか、日々悩み、担当内で議論を重ねました。今までのような、体験する方とスタッフが密接にコミュニケーションをとりながらものづくりをすすめるやり方では安全性が担保できず、従来どおりの運営が難しいことが分かり、当たり前のことだと思っていたことが、実は奇跡的で有り難いことだと気づかされました。「この対策を行えば絶対に安心・安全」という手段が明確にない中で、「新しいゆめ・体験ひろば」の運営方法を手探りで検討しました。

そして、7月21日から、体験メニューを一部制限しての再開となりました。感染症予防対策をしての再開ですので、これまでとは体験メニューの進め方が少し変わります。以下は、令和2年10月16日現在における、主なものづくり工房の感染症対策です。

対策①：体験メニューの「事前予約制」「時間割制」

→工房内の「密」を避けるため、予約制・時間割制となっ

ております。体験できるメニューは藍染め、まが玉、組紐に限定しております。

対策②：体験者・スタッフ間の社会的距離(1～2m)を保持しながらの体験

対策③：テーブルやイス、道具類の消毒

→使う度ごとに消毒しています。どうしても共有で使わざるえない道具については、消毒のうえ、数日おいてから使用しております。

他には、マスク着用や飛沫防止シートの設置、1グループにつき原則として1体験のみ受付けるなど皆様に安心・安全に体験していただけるようできる限りの対策を行っております。



写真 感染対策を講じた上でのものづくり体験の様子

ゆめ・体験ひろば再開から3か月近くなりました。再開直後は、果たして皆様にきていただけるのか、と不安に感じておりましたが、今までと変わりなく多くの方々に体験いただいております。

コロナ以前と異なる運営ですが、体験者の「楽しかった！」「(自分の)子どもがこんなことができるなんて！」という笑顔や驚きを見ることができて安心しています。

今までのように外に出て遊ぶことが難しくなっていますが、ここ、ものづくり工房をはじめ、ゆめ・体験ひろばは開いております。できる限りの安全対策を行っておりますので安心して遊びに来てください。

今は今しかありません。一緒に、今できることをやりましょう。ものづくり工房は、皆さまの楽しみのお役に立てればと思います。

(学習支援担当 徳田真琳)

歴史と民俗の博物館では、学芸員の資格を目指す大学生を対象に博物館実習を実施しています。今年度も、例年通りの実施を考えていました。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大のため、博物館も休館になり、毎年6月に実施していた博物館実習も9月に変更となりました。9月になれば、状況も少しは落ち着くかと思っていましたが…。

残念ながら、三密を避け、新型コロナウイルスに感染しない・させないように気を配りながらの実習となりました。

当館で行う博物館実習は展示、体験学習や各分野の資料の取扱いなど、学芸業務を一通り体験してもらえるような実践的なカリキュラムを組んできました。しかし今年度は実習の日程を変更した影響により展示室に空きが無いことや、展示ケースという狭い密閉空間に複数人が出入りすることの危険性から展示実習と、実習生を不特定多数の来館者と接触させることの危険性から「ゆめ・体験ひろば」の体験学習指導は中止せざるを得ませんでした。

さて、今年度は13大学、25名の実習生を受け入れました。9月1日から4日までの4日間の実技実習と展示実習と体験学習指導の代わりにレポート提出が今年度の博物館実習です。

第1日目は、まず各担当の事業内容を説明した後、実習生を2グループに分けて、資料調査・活用担当から「資料・施設・環境に関する実習」として、当館でのIPM(薬剤だけに頼らない有害生物から文化財を守るための取組)のあり方を中心とした講義とバックヤードの見学を行いました。

第2日目は、体験学習実習(まが玉作り・藍染めハンカチ作り)を体験し、「体験のさらなる充実及び幅広い層の来館促進」について、少人数で協議し発表してもらいました。実習生の多くが、体験学習の狙いとは何なのか、当館で実施する意味とは…と体験学習の難しさと奥深さを感じ取ってくれたようです。

また、広報に関する実習ということで、「地域住民により活用してもらうために必要なこと」をテーマに協議してもらいました。当館のホームページの改良点の指摘やイベントの立ち上げなど、様々な意見が生まれました。

第3日目は民俗資料と歴史・古美術資料の取扱い実習です。掛軸や巻子を広げて、巻き直す作業や資料の保存状態を検品調書に記録する方法などを実践してもらいました。掛軸を壁に掛けたり、取り外したりする作業では実習生の緊張がこちらにも伝わってきました。

民俗資料は、実際に体験したあと、小学校での体験プロ



写真 資料の取扱い(掛軸の取扱い)

グラムを考えてもらいました。班ごとに様々な体験プログラムを考え、積極的に話し合っていました。

第4日目は、考古資料の取扱いとIPMの作業です。考古資料の取扱いでは、検品調書の記録の取り方や資料の梱包を実践してもらいました。丁寧に素早く梱包する作業に悪戦苦闘しながらも、慣れてくると、手早く梱包できるようになっていました。



写真 資料の取扱い(検品調書の作成)

またIPMの作業では、民俗資料の清掃を体験してもらいました。

最初は緊張していた実習生も、徐々に打ち解けて、積極的に協議や作業に取り組んでいました。大学の授業の多くがオンラインの中、実際に資料を手にとって作業をすることで、学べたことも多かったようです。

我々も実習生の姿を見て、実物を見たり触ったりすることの大切さを改めて実感しました。

(企画担当 倉澤 麻由子)